影法師

豊島与志雄

一

うしろに山をひかえ前に広々とした平野をひかえている、低いなだらかな丘の上に、小さな村がありました。村の東の端（はし）に、村一番の長者（ちょうじゃ）の屋敷（やしき）がありまして、その塀（へい）の外の広場は、子供たちの遊び場所でした。白く塗った土塀（どべい）、左手はゆるやかな山すそで、いろんな灌木（かんぼく）や草がはえています。前には小さな川が流れていて、魚が泳いでいます。川の向こうと右手の方には、たんぼが続いています。子供たちはその広場でおもしろく遊ぶことが出来ました。

晴れた日の朝早く、長者の子供を交(まじ)えて三四人の子供が、いつものように、そこで遊んでいました。東の地平線から出たばかりの太陽の光りが、皆の影を白い壁にくっきりとうつしていました。その影があまりはっきりしておもしろいので、皆は影うつしの遊びを始めました。

「ああ、いいことを考えた」と長者の子供がふいに叫びました。「待っといでよ、じきに来るから」

そして長者(ちょうじゃ)の子供はいきなり駆け出して、うちの中にはいって行きました。

お祖父(じい)さんが、大きなまんまるい眼鏡(めがね)をかけて、

縁側（えんがわ）で本を読んでいました。
「お祖父さん、僕にあの……東の塀（へい）を下さいよ」と子供は言いました。
お祖父さんは、まんまるい眼鏡の下にびっくりした眼を開いて、子供を見ました。
「なに、塀をくれって……」
「ええ、下さいよ。おもしろいことがあるんです。こわしやしません。ただ遊ぶだけなんです。塀で遊ぶんです。ね、いいでしょう」
「塀で遊ぶって……おかしなことを言う子だね。こわしさえしなければよいけれど……」

「じゃあ下さいね。遊ぶだけなんですから」
　そして子供はもうお祖父さんの側から駆け出して、部屋の中にはいって、大きな硯箱（すずりばこ）を持ち出して、またもとの塀の外に駆けてきました。
「何をするの」
　待ってた子供たちが集まってきました。
「今ね、この塀をお祖父さんからもらってきたんだ。だから、こわしさえしなけりゃ、何をしたって叱（しか）られやしないよ……これから皆の影法師（かげぼうし）を、この塀の上に写し取るんだよ」
「影法師を写し取る……うん、おもしろいな」

皆はわーっと声を立てておもしろがりました。そしてすぐにそのしたくにかかりました。小川の水を硯にくみ取って、一生懸命に墨（すみ）をすりました。早くしないと、太陽が昇ってしまいます。太陽が昇ってしまえば、影法師（かげぼうし）は小さくなってだめなんです。

「僕が考えたんだから、僕が先だよ」

そう言って長者の子供は、白い塀（へい）の前につっ立ちました。その姿通りの影が、白塀（しろべい）の上にはっきりうつりました。それを他の子供たちが、墨（すみ）をいっぱいふくました筆で写し取りました。

「影法師なんだから、すっかりまっ黒に塗らなけりゃ

いけないよ」
　そして皆は影法師の形をまっ黒に塗り始めました。硯（すずり）の水がなくなると、また小川の水を汲（く）んできて墨をすりました。
　そのうちに、太陽はずんずん昇っていって、塀にうつる影法師は小さな不格好なものになりましたので、長者の子供一人のだけで、他のは写し取れませんでした。
「また明日の朝にしよう」

二

毎日晴れた日が続きました。子供たちは朝早くから白塀の前に集まって、かわるがわる影法師を写し取りました。

そのことをおもしろがって、他の子供たちも集まって来ました。そして太陽が出たばかりの頃、日に二つか三つずつ影法師を写し取りましたが、日がたつにつれて、塀いっぱいたくさんになってきました。高いのや低いのや、肥（ふと）ったのややせたのが、皆まっすぐを向いてずらりと並びました。墨でまっ黒に塗った影法師（かげぼうし）ですから、太陽がいくら高く昇っても、太陽が沈んで

晩になっても、ちょうど人がつっ立ってるように、そこに、白い塀の上に、つっ立っています。

それを見て、通りがかりの大人たちは、「えらいことを始めたな」と言いながら、にこにこ笑っていました。長者のうちのお祖父さんも出て来て、大きなまんまるい眼鏡の下に眼をまんまるくして、「ほほう」と感心したように眺め入りました。

「これが僕んですよ」

「これが僕んですよ」

子供たちはめいめいそう言って、自分の影法師の前に立ってみせました。背の高さから形まで、身体どお

りの影法師でした。

さて皆の影法師が写し取られて、塀いっぱいに並びますと、これからどうしようかと、子供たちは考えました。写し取っただけではいっこうつまりません。

「影法師が塀からぬけ出して踊ってくれるといいんだがなぁ」

そう皆は考えました。そしていつも塀の前に集まっては、何度もくり返して考えました。しかしそんなことが出来るわけはありません。

ところが、ある日、皆がやはりそこに集まって、同じことをこそこそ話し合っていますと、いつのまにど

こからやって来たか、髪の長い見馴れない男が、そばにつっ立って笑っています。

「君たちはばかなことを考えてるね」

そしてやはり、塀の影法師を見て笑っています。

子供たちはそれがしゃくにさわりました。髪の長い見馴れない変な男ですけれど、それもかまわずに、皆でつめよっていきました。

「何を言ってるんだい。何がばかなことなんだい。影法師を踊らせようとするのが、何がばかなことなんだい。おもしろいことじゃないか」

見馴れない男は、さも愉快そうに、はっはっ……と

笑いました。そして言いました。

「なるほど、私が悪かった。それはおもしろいことに違いない。……それでは一つ私が教えてやろうか。その影法師を踊らせることを、教えてやろうか」

「え、おじさんはそんなことを知ってるの。教えて下さい。ね、教えて下さい」

「じゃあ教えてやろう。そのかわり、私の影も一つ、そこに写し取ってくれなくてはいけない。そして、明日の朝早くここに来れば、君たちの影法師は踊れるようになってるだろう」

子供たちは大変喜びました。そして塀（へい）の片隅（かたすみ）の空（あ）い

てるところに、見馴れぬ男の影法師を写し取りました。もう太陽が高く昇っていましたので、男の影法師は低くぴしゃんこになって、おかしな格好でした。

「だめだよ、日が高くなってるから……。おかしいな」

「いや、それで結構だ」

そして男は、自分の変な影法師を見て、はっはっは……。と笑いました。

「それでは、明日の朝早く皆でそろっておいでよ」

男はそう言いいすてて、どこかへ行ってしまいました。

三

子供たちはその晩、おちついて眠れませんでした。自分たちの墨絵（すみえ）の影法師（かげぼうし）が、塀（へい）からぬけ出して踊りはねるというんですから、待ちきれませんでした。翌朝は早くから眼をさまして、皆誘い合わせました。大人（おとな）たちが何かたずねても、今にびっくりさしてやるという気持ちで、まじめくさった顔をして黙っていました。

やがて皆そろいましたので、胸をどきどきさせながら、長者の屋敷（やしき）の東の白塀（しろべい）のところへやって行きました。

ところが、一目（ひとめ）見ると、皆はあっと口の中で叫んだまま、おどろいて立ち止まりました。皆のおもしろい影法師がいっぱい立ち並んでいた白塀は、一面に何かでまっ黒に塗られてしまって、そのまっ黒な色がまたひどく濃（こ）くて、いわば闇の鏡みたいになっているのです。影法師どころか何一つ見えないで、ただ一面にまっ黒なだけです。

「はっはっはっは……」

高い笑い声がしたので振り向くと、昨日の男がそこに立って笑っています。

「私のあのおかしな影がね、一晩のうちに大きくなっ

て、塀いっぱいにひろがったのだ。とんだことになってしまった」

それを聞くと、子供たちは急に怒り出しました。その男がだましたのだ。嘘を言ってるんだ。影法師が一晩のうちに塀いっぱいに大きくなるなんて、そんなことがあるものか。その男が塀をまっ黒に塗りつぶして、皆の影法師をなくしてしまったのだ。

「嘘つき、嘘つき。僕たちをだましたんだな」

そう言って子供たちはつめよっていきました。

「はっはっはっ……」と男は平気でなお笑っています。

「人をばかにしてる。なぐっちまえ」

気の早い子供たちは、棒ぎれを拾ったり、石をつかんだり、げんこを握りしめたりして、男へ向かっていきました。男は笑いながら、あちこちへ身をかわしました。ひどくすばしこい影のような男で、大勢（おおぜい）でいくら追っかけても、つかまえることが出来ませんでした。

「君たちはばかだな」と男は広場の中を逃げ廻りながら言いました。「そら、まっ黒な塀の中で、影法師が踊ってるじゃないか」

そう言われてから皆は初めて気づきました。東から出た太陽の光を受けて、黒い鏡のように光っている塀の中に、皆の影法師が浮き出していました。白塀（しろべい）にう

つったのとちがって、奥深いまっ暗な中にうつってるものですから、そうはっきりはしていませんが、すかして見ると、ちょうど生きた人間のように浮き出しています。それが、皆が動くにつれてあちこちへ動き廻って、大勢（おおぜい）の本当の子供たちが踊ってるようなんです。

「おや、これはおもしろいや。ふしぎだなあ」

皆は黒塀（くろべい）の鏡に影法師をうつして、ふしぎそうにのぞきこみました。眼や口や鼻までそっくり見えて、向こうにも同じ生きた子供たちがいるようなんです。

「わかったかね、はっはっは……」

皆が振り返ってみると、髪の長い見馴れぬ男は、なお笑いながら立ち去って行きました。引き止めるまも何もなく、まるで宙を飛ぶようにして、山の方へ見えなくなってしまいました。子供たちはあっけにとられました。

そこへ、長者のうちのお祖父さんが出て来ました。子供たちは昨日からの話をしました。お祖父さんはびっくりしたように、まっ黒な塀を見ていましたが、しまいに言いました。

「それはきっと、大変えらい人にちがいない。お前達はよいことを教わったものだ」

子供たちはさっぱりわけがわかりませんでした。けれど黒塀（くろべい）の鏡が出来たのはうれしいことでした。朝日のさしてる時ばかりでなく、午後になっても、月が出てれば夜分（やぶん）でも、黒塀の鏡は皆の姿をうつし出してくれました。それもただの影法師（かげぼうし）ではなく、生きた人間と同じ姿なんです。

皆はいろんな姿をうつして、自分も踊り影の姿も踊らして、いつも大変愉快に元気に遊びました。

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社
　　１９９０（平成２）年11月27日第1刷発行
入力：kompass
校正：門田裕志、小林繁雄
２００６年４月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。